様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月１８日現在

機関番号：１４６０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０４０４
研究課題名（和文）応用認知言語学における英語ライティングの研究
研究課題名（英文）　A Study of English Writing in Applied Cognitive Linguistics
研究代表者
吉村　公宏（YOSHIMURA　KIMIHIRO）
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：90174987

研究成果の概要（和文）：優れた考えであってもそれを適切に表現できないため、誤解されたり消化不良のままで終わるコミュニケーションが多い。このことは日本人学生における英語ライティングにおいて顕著である。この問題は大学および大学院におけるライティング指導のみならず中高等教育における英作文・英文法指導のあり方にも端を発している可能性がある。認知言語学は言語使用の実際と言語経験に焦点を当てた「用法基盤モデル」に依拠しており、それに基づいた応用認知言語学は英語ライティングの実践的指導の向上に資する可能性が高い。そこで、本研究は応用認知言語学に基づき、認知言語学の理論的成果を実践的な英語ライティング指導に活用する方途の解明を目的にした。教室現場等から採集した英語ライティングのエラーデータをもとに、その分布を文法特徴、テキスト構成などの視点から分析した。その結果、一定の傾向・特性の現れを確認し、それらを理論的に解明することによって、実践的指導に生かす新たな方途を提言した。具体的には、日英語における事態の「捉え方」の異同、活用メタファーの異同、思考展開スタイルの異同を明らかにした。これによって、グローバル化しつつある現在の英語コミュニケーションにおいて、より自然な英語発想に基づくライティングとその指導の方向性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：We often have misunderstandings in our daily conversations. Unfortunately, this is also true of written texts, even of English writings by Japanese students at the undergraduate and graduate level. One possible reason for this can be traced back to the stage of English grammar and writing teaching in junior and senior high school. Recently, Applied Cognitive Linguistics (ACL) has developed under the Cognitive Linguistic premise called the “Usage-Based Model”, the basic idea of which is focused on the practical aspect of language use and of linguistic experience. Thus, ACL, we believe, is one of the most promising approaches to the advancement of English writing ability for Japanese students. Based on the study of Cognitive Linguistics, our research objective is to explore the way(s) ACL can be applied to the development of practical English writing skills for Japanese students. First, we analyzed distributions of the authentic data collected from classroom English, looking specifically at grammar and textual composition. After the theoretical, as well as descriptive, examinations of the data, we arrived at the conclusion that when students whose data was sampled express their ideas several biases were identified, particularly involving a propensity for the use of some sentence patterns (e.g. topic-comment style) and that of the constitution of a paragraph and an essay. From an ACL standpoint, we found that they were ultimately derived from the difference in “construal,” “metaphor” and “rhetorical style”, which are selectively but unconsciously exerted in the interlanguage English-Japanese communication. In order to alleviate these biases, we proposed pedagogical directionalities that will lead to the promotion of English writing ability through classroom teaching.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学、語用論、認知言語学
キーワード：応用認知言語学、英語アカデミック・ライティング、英語教育

１．研究開始当初の背景

本来、理論分野と応用実践分野とは相互に補完すべき関係にある。成果を交流し合い、刺激を与え合い、ともに切磋琢磨して学術の進展に寄与すべきことが期待される。しかしながら現実には、必ずしも両者がそのような理想的関係にあるわけではない。

言語学理論と語学教育の関係も、全てではないにせよ、こうした理想的関係を享受してきたわけではない。このことに関連して、実際上、理論研究者の多くが同時に英語教育等の語学教育の担当者であるということから、両者の学術的乖離を不幸なことと捉える者も少なからずいたことが想定できる。

言語学理論の中で、本研究が依拠する理論は認知言語学である。認知言語学は本格的に始動していまだ２０有余年である。言語理論としては若い学問ではあるが、幸いにして近年、本理論と語学教育との接点を模索する動きが見られるようになった。両者をつなぐこの領域を総称して応用認知言語学(Applied Cognitive Linguistics、以下 ACL)と呼ばれるようになってきた。

当初の応用認知言語学の多くは、海外にあっては西欧諸語を母語とする者に対しての英語教育であり、国内にあっては留学生を対象にした日本語教育が主流となってきた。この両者はともに現実的な需要が高く、このことが研究を推し進める原動力の一因であったと思われる。ところが、日本国内の英語教育と認知言語学との接点を模索する動きは鈍く、研究成果はきわめて手薄と言わざるを得ない状況にあった。その理由の一端は、伝統的な手法で学習文法と読解指導に重きを置く教授法がいまだ大勢を占めている一方で、その利点を指導に組み入れるほど応用認知言語学自体が成熟していなかった点に求められよう。

実際、日本では英語が中高等教育において重要な外国語の位置を占める現状にも関わらず、理論的成果を教室での英語学習や指導法に還元する方途が十分に追究されてこなかった。本研究の主眼は、こうした現状の不備をいくらかでも改善・進展させるため、理論の応用的側面に焦点を当て、限定的ではあるが、実践的な指針となり得るような成果と提言を成すことにある。

認知言語学は、そのパラダイム展開の前提に「用法基盤モデル(Usage-Based Model)」を唱える。それは言語使用の実際の場面情報や、日常的な言語経験を重視する姿勢と結びついた言語モデルである。それが認知言語学の理論的基盤にあるということである。たとえば、表現の慣用性とその定着、あるいは拡張といった言語現象はわれわれが日常的に経験することの 1 つである。それ以外にも、イメージの記憶と連想に関わるフレーム意味論、場面の経験に動機づけられた構文スキーマ理論、状況理解を支える「捉え方」など、いずれも用法基盤モデルを前提にした理論的概念であり、理論的成果でもある。

こうした用法基盤モデルに立脚する認知言語学の諸成果は、日本語を母語とする学生・院生の英語学習の場においても、一定の貢献が期待できる。たとえば、動機づけの薄い記憶中心の単語・構文学習から、捉え方や発想の違いを理解した上での英語学習へと転換できる可能性がある。また、そうすることによって、状況に即した個性的で創造的な英作文・英語エッセイ指導への道が拓ける可能性もある。

現在、黎明期にある応用認知言語学の手法を英語学習とその実践的指導の方向へ拡張して適用することで、新しい指導法を探求できる可能性が生じてきた。本研究は、こうした現状の下、理論と実践の望ましい本来の相互補完関係へと誘い、ACL の新しい段階に一歩踏み出すための基礎的研究と位置づけられる。

２．研究の目的

認知言語学の理論的成果を基盤に、それら

を実際の高等教育（主に大学・大学院）における思考の表出プロセス（英語アカデミック・ライティング）の指導に応用・活用する方途を明らかにする。

英語ライティングは口頭によるコミュニケーションとは違い、さまざまな点において多様な種類のエラーが顕在化し、記録され、保存される。公式な文書作成からオピニオン・エッセイ、個人的なメールに至るまで多彩な局面において、適切な描写力と表現性が必要とされる語学技能である。それにもかかわらず、また中高等教育による実践的努力にもかかわらず、大学生、大学院生の書く英作文・英語エッセイには多様なレベルにおける根深いエラーが付きまとう。これにはさまざまな要因が予想されるが、その最も大きなものは学生側・指導者側とも日英語の発想や事態の捉え方の本質を客観的に認識せず、根底にある認知方略の異質性を看過したままで実践・実作に移るからであると考えられる。

本研究が依拠する応用認知言語学は、こうした要因の解明に焦点を当て、その成果を指導上の提言にまで高めることによって、理論と実践の新たな融合を目指すことに置かれる。

３．研究の方法

第１段階として主として ACL に関連した先行研究の精査を行う。その概要に基づき、予想される問題点（エラーの分類、アカデミックライティングの定義等）の整理をする。

第２段階として、データ収集とその分類、エラーの性質と種類を特定する。

第３段階として、摘出されたエラー分布に潜在する傾向性、原理的側面などを記述的に解析する。

第４段階として、認知言語学理論の諸観点からエラーの傾向性とエラーを誘発する原理を検討する。

第５段階として、第４段階の考察結果を基に、大学生・大学院生をはじめとする中高等教育における望ましい英語ライティング指導の進め方について提言する。

全体として、応用認知言語学のアプローチに従うが、特に、日英語対照比較の視点を取り込む。エラー分析を通じて、母語干渉の認知言語学的意味を探り、それを基に、自然言語の１つとして英語という言語が要請する、あるいは「好ましい」とする書き方の特徴を抽出する。翻って、日本語が要請する、あるいは「好ましい」とする書き方との違いを検討した上で、実践的な指導に応用する方途を探る。

４．研究成果

本研究の目的と方法に照らして研究を進めた結果、得られた成果は以下の通りである。

(1)応用認知言語学という交差的・学際的領域に基づいて、幅広く文献資料の収集を行った結果、本研究が問題とする現象の多面的、重層的な側面が明らかになった。たとえば、エラーは、単語の選択ミスや文法ミスのような誤解や知識の不足に起因するエラーだけではない。こうしたエラーでなくとも、母語話者が理解に困難を感じるような、あるいは不自然で奇異に感じるような疑似的なエラーが目立つ。たとえば、日本人学生は特定の文型（SV）や特定の構文(There is ～)を頻用することが確かめられたが、それによって情報の流れが乱され、分かりにくさが増加する。日本人の書く英語エッセイでは1人称主語が好まれる傾向にある。これらは文法的にはエラーではないが、パラグラフやエッセイの構成面での不自然さを増す一因と解釈できる（雑誌論文）。

また、認知言語学以外の分野の文献や研究成果に接することにより、ライティングの重層的側面が明らかになった。たとえば日本人英語には一般的に、述べたい論旨や主張が曖昧化する傾向があるとされるが、これは日本人の思考表出の背後に、間接的・婉曲的言い回しを好む文化的風土が潜在するためであると考えられる。文章表現で何が説得力を持つかは、単に論理や因果関係の明晰さだけによるものではなく、広く文体論(stylistics)や修辞学（rhetoric）（＝思考表出の文化的類型）などの領域も関わっていることが判明した。たとえば、「対照レトリック学(Contrastive Rhetoric)」を提唱した Kaplan(1966) や Connor(1996)などの考察は、本研究を進める上で必須の文献となった。こうした点を総合的に考慮した上で、望ましいライティングの特徴を規定すべきことが明らかとなった。

(2)　本研究の研究者2名はともに英作文、英文法、英語エッセイライティング指導等の英語教育に関わっており、講義・演習等を通じて本研究に資するデータを蓄積した。短い一文から、パラグラフ・ライティング、エッセイ・ライティングに至るまで幅広くデータを

収集した。その結果、頻出するエラーの特性を整理・記述することができた。また英語の母語話者の協力と関連文献を基に、エラーではないものの英語圏では好まれない表現、あるいは好まれないエッセイ構成の実態も観察した。

記述的な観点からデータを考察した結果、日本人学生の英語ライティングには、語法・文法・文型・パラグラフ構成・発想・メタファーなど、異質なレベルでのエラーの出現が観察された。また、エラーとは言えないまでも、回避すべき表現、言い換えるべき表現など、表出上のバイアスも観察された。それらは頻度（同一エッセイ内／異なるエッセイ間）において、一定のエラー傾向をもって出現することが判明した。そこで、エラーのカテゴリー分けとして、文法的エラー・母語干渉的エラー・レトリック的バイアスの３つに大別できる。冠詞の選択ミス、時制の不一致などは文法的エラー、日本語の「アル」「ナル」に引きつられた英語表現(SV, SVC)の多用は母語干渉的エラーの１つであろうし、語りの視点を書き手中心に進めるエッセイ構成などはレトリック的バイアスに属する（雑誌論文）。

こうしたエラー特性・バイアスの一部は認知言語学理論に依拠したモデルから説明可能であることを確認した。たとえば語法・文法に関わる成果の一部には次のような考察が含まれる。冠詞のエラーは定・不定を決定する要因の１つである「聞き手本位」か「話し手本位」かといった「捉え方」の相違が関わっている（図書1）、学生が苦手とする再帰代名詞用法は、主体と自己に分裂させる英語圏メタファーからの説明が可能である（雑誌論文、図書2）、受動態(passive voice)の機能を十全に理解させることで日本語母語干渉を受けた英作文を回避する（図書3）、などである。

(3) パラグラフ構成・発想に関わる成果の一部には次のようなものが含まれる（図書1）。

たとえば日本人学生は因果関係を表わすのにbecauseを避け、andないしはthereforeを用いる傾向が強い。因果関係の認識自体は万国共通ではあるが、それがオピニオン・エッセイなどの場合、説得の土壌に適合するかどうかの判断が異なる。データが示していることは、エッセイ構成にも、好まれるタイプとそうでないタイプが日英で大きく異なっており、それを認識した上で情報配列を整える必要性があることが判明した。上記の傾向は、英語ライティングにおいては発想に関わる文化的価値観の相違が反映されていることを示唆するが、一方で英語自体がグローバル化しつつある現在において、英語のエッセイライティングを最低限どの程度まで英語母語話者の価値観に合わせるかという問題を浮かび上がらせた。

(4) さらに、エラー特性・バイアスの整理と解明を進めた結果、認知言語学の観点から、母語干渉による思考表出の特性を、一定限度内ではあるが、客観化して示すことが可能となった（図書1中の「遂行動詞」「人称・時制・数」「語順」「フレーム」など）。

データ考察を基に、エッセイ構成全般について導きだされた提言は以下の通りである(図書1)。英語圏が支持する好ましい英語エッセイとは、(1)読み手の予備知識を前提に書かない(2)内容を客観化して述べる（＝書き手自身も客観化の対象とする）(3)主張したい結論・論点から書く、である。(3)はこれまで一般によく言われて来た提言であるが、採集したデータからも裏付けられた。(1)(2)については、応用認知言語学的視点から分析されたという点でははじめての提言であり成果ではないかと考える。

提言(1)について述べる。多くの大学生や大学院生の書く英語パラグラフやオピニオン・エッセイでは、読み手の予備知識を無意識に前提した上で論を進める傾向があることが分かった。一般に、高文脈社会と言われる日本人コミュニティーでは、暗黙の了解事項が多く、そのため重要語の定義やテーマの背景を無視して、あたかも仲間内に向けて発信するタイプの書き方が好まれる。このことは現代

の大学生・大学院生でも同様である。これとは対照的に、英語文化圏の支持するエッセイタイプはそうではなく、テーマと内容に関して読み手の無知・無関与をスタートラインとして始められ、重要語をあらためて定義し、事実や証拠を論理的に積み重ねて説得する手法が好まれる。こうしたことは、米国の場合ではすでに中高等学校段階から授業に組み込まれていることはよく知られている。

結局、日本人学生の英語エッセイは書き手中心に進められる傾向が強く、その原因の一部は高文脈社会に依存した情報発信の仕方がなおも続いていること、また言語としての日本語の特性にも認められる。自己中心的な書き方と日本語の言語特性の両者は、認知言語学でいうある種の相同性を構成するものと結論づけた（図書１）。

提言(2)について述べる。書き手は自己の視点を内容から離し、客観的な描写態度を保持すべきである。大学生や大学院生のオピニオン・エッセイは、書き手の主観的な心情とその動きを中心に書く傾向がある。事実は何か、事実の推移はどうであったか、帰結から想定できる原因は何かなど、自己を事態から切り離した描写法を回避する傾向が強い。これは日本語エッセイでも同様の傾向が観察された。その一因は、臨場感や一体感の表出を重視してきた指導（感動した体験談を書かせる作文教育など）にあることが推定されるが、より根源的な要因としては、客観的経緯の描写よりも主観の表出を重んじる日本文化の価値観（和歌・俳句などの詠嘆）などにも求められよう。

現在、あるいは来るべきグローバル社会おいて必要とされることは、主観を離れた客観的事実を基礎に考察の論理をつなぐ書き方ではないかと思われる。もちろん、状況次第で、主観的心情の表出も大きな価値を有することもあろうが、問題はそれをそのまま顕在化させる書き方にある。本研究の提言の１つは、今後、事実と論証を通して心情理解に至ろうとする英語圏の書き方に近づける努力が必要ではないか、ということである。

現在、世界における共通コミュニケーション言語として英語が優勢であることは異論ないところであろう。問題は、そうした英語自体が言語として要請してくる書き方が存在し、それが低文脈社会に適合した情報発信法であることを理解しているかどうかである。英語ライティングにおいては、日本語母語話者はこのことを認識しておく必要があろう。文化的価値観の相違など、越え難い壁が存在することも事実であるが、少なくとも世界のスタンダードに準拠した英語ライティングの手法に親しんでおく必要がある。

以上、本研究はエラーデータやバイアスの特性を捉え、それらに対して理論的考察を加え、その結果を踏まえて具体的提言を行った。本研究の成果が語学教育に対して与え得る示唆の1つは、言語には文化が潜んでいると言うことである。まとまった文章には、書かれた内容を効果的に伝えるための表出法が潜在しており、その言語圏の文化と価値観を沈黙のうちに運ぶ役割を果たしているということである。また、文法や統語法などといった言葉の仕組みにも「どのように伝えたいか」という母語話者の「捉え」が反映されているということである。

こうしたことの認識と自覚を英作文・英語エッセイライティング指導の中に取り込むことで、異文化の深層への理解、また、英語や日本語を学習することの意義を一層深めることができるのではないか、ということである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）「認知言語学からみた語学教育」大修館書店　月刊「言語」　第 38 巻　2011 年 5 月　pp. 18-23　吉村公宏

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計３件）
(1)『英語世界の表現スタイル－「捉え方」の視点から』 単著　青灯社　2011 年　総ページ数 153　吉村公宏

(2) 「メタファーと再帰代名詞」『最新言語理論を英語教育に活用する』藤田耕司他編 2012年3月　pp.153-164 吉村公宏
(3) 「認知言語学からみた受動態：英作文へのヒント」『最新言語理論を英語教育に活用する』藤田耕司他編　2012年3月 pp.394-402 米倉陽子

６．研究組織
(1)研究代表者
吉村　公宏（YOSHIMURA　KIMIHIRO）
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：90174987
(2)研究分担者
米倉　陽子（YONEKURA YOKO）
奈良教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：20403313